

内芝慎也

0. はじめに

- (1) a. [太郎との相席]は難しいが、[次郎との]は問題ない。
 b. 花子は[太郎との相席]を断り、順子は[次郎との]を断った。
 c. *順子は[太郎との相席]をし、花子は[次郎との]をした。
 (cf. 順子は[太郎との相席]をし、花子もした。)
- ・ 動名詞 (verbal noun) は通常の名詞とは異なり単独で省略することができない (cf. 内芝 2015)。
 - ・ 本発表での主張: 通常の名詞は DP まで投射するのに対して、動名詞は NP までしか投射することができない (内芝 2008、Uchishiba 2009)。
 - ・ 理論的帰結: 冠詞を持たない日本語などの言語においても、名詞は DP まで投射する。
 - ・ 本発表の構成
 1. 動名詞の特徴
 2. 省略の一般的分析
 3. 省略に関する動名詞と通常の名詞との相違に対する説明
 4. 動名詞の投射制限と省略に課される条件
 5. まとめ

1. 動名詞の特徴 (Grimshaw 1990、影山 1993)

- ・ (i) 「VN スル」という編入形態が可能であること。
- (ii) 複雑事象名詞であること。
- (iii) 「それ」等の代名詞で代用もしくは参照することができない。
- (iv) 「多数」等の数量詞と共起できない。

(2) 動名詞「勉強」(他にも「相席」や「運転」等)

- a. 太郎は[英語の勉強]をした。
- b. 太郎は英語を勉強した。
- c. *それは[太郎がした勉強]だ。
- d. *太郎は[多数の勉強]をした。

(3) 単純事象名詞「宿題」(他にも「贈物」等)

- a. 太郎は[英語の宿題]をした。
- b. *太郎は英語を宿題した。
- c. それは[太郎がした宿題]だ。
- d. 太郎は[多数の宿題]をした。

- (4)
- a. *太郎は[英語の勉強]をして、次郎は[フランス語の]をした。
 - b. 太郎は[英語の宿題]をして、次郎は[フランス語の]をした。

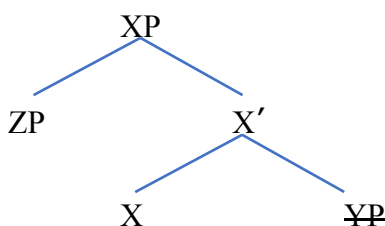
(5) 曖昧な名詞(例:「研究」等)

- a. 太郎は[統語論の研究]をしている。
- b. 太郎は統語論を研究している。
- c. それは[太郎がしている研究]だ。
- d. 太郎は[多数の研究]をしている。
- e. 太郎は「統語論の研究」をして、次郎は「形態論の」をしている。

2. 省略の一般的分析(Lobeck 1990、Saito and Murasugi 1990、Saito, et al. 2008)

・ 省略に課される条件: 機能範疇 X の指定部が埋まっている場合に限り、その補部を省略することができる。

(6)



(7) N'/NP 削除

- a. I have read Bill's book, but I haven't read [DP John's [NP ~~book~~]].
- b. *I have edited a book, but I haven't written [DP a [NP ~~book~~]].
- c. *I have seen the book, but I haven't had a chance to read [DP the [NP ~~book~~]].

(Saito, et al. 2008: 302)

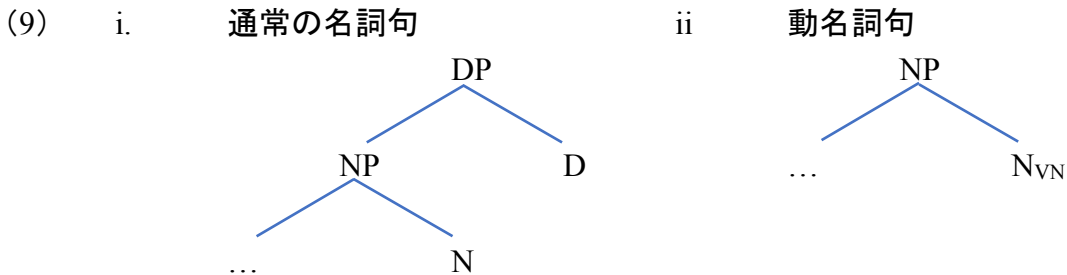
(8) スルーシング

- a. John bought something, but I don't know [CP what [TP ~~he bought~~]].
- b. *John insisted that he turned in his homework, but I was't sure [CP whether [TP ~~he turned in his homework~~]].
- c. *John insisted that he turned in his homework, and Bill reported to Mary [CP that [TP ~~he turned in his homework~~]].

(Saito, et al. 2008: 302)

3. 省略に関する動名詞と通常の名詞との相違に対する説明

・ 主張: 通常の名詞が DP まで投射するのに対して、動名詞は NP までしか投射することができない。



- (10) a. *太郎は[_{NP} 英語の勉強]をして、次郎は[_{NP} フランス語の[_N 勉強]]をした。
 b. 太郎は[_{DP} 英語の宿題]をして、次郎は[_{DP} フランス語の [_{NP} も[_N 宿題]]]をした。

・ 主張を裏付ける事実: 動名詞は (i) 「それ」等の指示代名詞で代用することができず、また (ii) 「その」等の指示詞と共起することができない。更に、(iii) 「多数」等の数量詞と共起することもない。

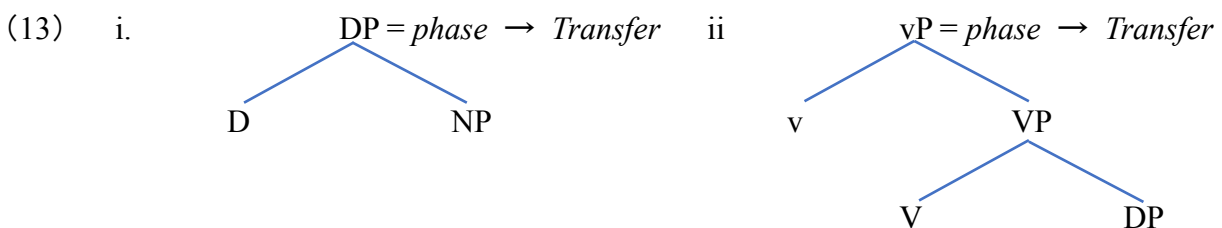
- (11) a. *太郎は[_{NP} 英語の勉強]をして、次郎もそれをした。
 b. *太郎は[_{NP} その/あの勉強]をした。
 c. *太郎は[_{NP} 多数の勉強]をした。

- (12) a. 太郎は[_{DP} 英語の宿題]をして、次郎もそれをした。
 b. 太郎は[_{DP} その/あの宿題]をした。
 c. 太郎は[_{DP}[_{QP} 多数の宿題]]をした

4. 動名詞の投射制限と省略に課される条件

・ 主張: 動名詞の投射制限と省略に課される条件は、それぞれ現在の位相理論 (phase theory) とラベリング (labeling) から導き出される。

・ 位相 (Chomsky 2001, et seq): 派生の一単位 (DP, vP, CP 等)。位相が完了する毎に、解釈部門への転送 (Transfer) が行われる。

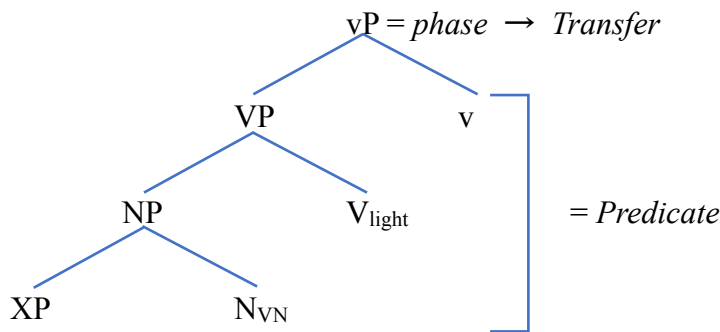


・ラベリング (Chomsky 2013、2015) : 統語要素の主要部を決定することであり、ラベル付けが行われなければ、その統語要素は解釈を受けることができない。

- (14) i. Label {X, YP} = X
 ii. Label {XP, YP} = ?

4. 1. 何故、動名詞は NP までしか投射できないのか

(15) 軽動詞構文 (light-verb construction)



・位相理論に基づく解答: 動名詞と軽動詞が同じ領域内で合わさって単一の述部として解釈されるため。もし、動名詞が DP まで投射してしまうと、(13) でのように NP と VP が別々に転送されてしまい、それらが纏まってひとつの意味単位として解釈される機会がなくなってしまう。

4. 2. 何故、機能範疇の指定部が存在しなければ、その補部の省略が認可されないのか

(16) 転送によるラベリング (Narita 2011、2014、Goto 2013、Takita, et al. 2016)

- i. Merge {X, YP} (Label = X)
 ii. Merge {ZP, {X, YP}} (Label = ?)
 iii. Transfer at (ii): {ZP, {X, ~~YP~~}}
 iv. {ZP, X} (Label = X)

・ラベリングに基づく解答: 機能範疇の指定部を埋めることが、その補部の転送を引き起こし、転送の領域と削除の対象が同一であると考えたと (Holmberg 2011、Bošković 2014、Aelbrecht 2016)、機能範疇の補部を削除するにはその指定部の存在が前提となることが導き出される。

5. まとめ

通常の名詞が DP まで投射するのに対して、動名詞は NP までしか投射しないと主張することで、動名詞が通常の名詞とは異なり単独で省略することができないという事実が説明されることを論じた。この主張が正しければ、冠詞を持たない日本語においても名詞句が DP まで投射することを意味し、このことは冠詞を持たない言語では DP の投射は存在しないとする Bošković (2008、2009) 等の主張に反するものとなる。更に、動名詞の投射制限と省略に課される条件が現在の位相理論とラベリングからそれぞれ導き出されることを示した。

参考文献

- Aelbrecht, Lobke. 2016. What ellipsis can do for phases and what it can't, but not how. *The Linguistic Review* 33, 453-482.
- Bošković, Željko. 2008. What will you have, DP or NP? In *NELS 37*, ed. by Emily Elfner and Wartin Markow, 101-114, University of Massachusetts, Graduate Linguistic Student Association, Amherst.
- Bošković, Željko. 2009. More on the NP-DP analysis of article-less languages. *Studia Linguistica* 63, 187-203.
- Bošković, Željko. 2014. Now I'm a phase, now I'm not a phase: on the variability of phases with extraction and ellipsis. *Linguistic Inquiry* 45, 27-89.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52. The MIT Press, Cambridge MA.
- Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam. 2015. Problems of projection: extensions. In *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 3-16. John Benjamins, Amsterdam.
- Goto, Nobu. 2013. Labeling and scrambling in Japanese. *Tohoku: Essays and Studies in English Language and Literature* 46, 39-73.
- Grimshaw, Mester. 1990. *Argument Structure*. The MIT Press, Cambridge MA.
- Holmberg, Anders. 2011. The syntax of yes and no in Finnish. *Studia Linguistica* 55, 141-175.
- 影山太郎 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房、東京.
- Lobeck, Anne. 1990. Functional heads as proper governors. In *NELS 20*, ed. by Juli Carter, Rose-Marie Déchaine, Bill Philip, and Tim Sherer, 348-362, University of Massachusetts, Graduate Linguistic Student Association, Amherst.
- Narita, Hiroki. 2011. *Phasing in full interpretation*. Harvard University dissertation, Cambridge MA.
- Narita, Hiroki. 2014. *Endocentric Structuring of Projection-Free Syntax: Phasing in Full Interpretation*. John Benjamins, Amsterdam.
- Saito, Mamoru and Keiko Murasugi. 1990. N'-deletion in Japanese: a preliminary study. *Japanese/Korean Linguistics* 1, 285-301.
- Saito, Mamoru, T.-H. Jonah Lin, and Keiko Murasugi. 2008. N'-ellipsis and the structure of noun phrases in Chinese and Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 17, 247-271.
- Takita, Kensuke, Nobu Goto, and Yoshiyuki Shibata. 2016. Labeling through Spell-Out. *The Linguistic Review* 33, 178-198.
- 内芝慎也 2008. 「日本語軽動詞構文における項構造と2つの対格制約」、『日本言語学会第137回大会』口頭発表、金沢大学.
- Uchishiba, Shin'ya. 2009. On the double-accusative constraint in Japanese light verb constructions:

surface or deep? Paper presented at *the 34th Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, held at Kobe Shoin Women's University.

内芝慎也 2015. 「日本語軽動詞構文における動名詞の削除と「動名詞＋する」複合体の組成」、『日本言語学会第 151 回大会』、口頭発表、名古屋大学.